

専門外来で視床下部の機能障害を確認 HANSの可能性が浮上

若年性線維筋痛症(JFM)は症状が多岐にわたり、検査で異常が見いだせないことから、小児科でも対応が困難な疾患とされる。フジ虎ノ門整形外科病院(静岡県)小児難病治療センター長の横田俊平氏(東京医科大学医学総合研究所小児難病部門長、横浜市立大学名誉教授)は「JFM外来受診患者の中に、JFMとは異なる疾患が疑われる者が存在した。それらの患者を調べると、“ヒトパピローマウイルス(HPV)ワクチン関連神経免疫異常症候群(HANS)”の可能性が浮上した。全身疼痛はあるものの、視床下部機能障害があり、JFMとは異なる」と独自の見解を示した。

複数の症状を併せ持つ症候群

横田氏は同センターのJFM外来受

診者の中に、全身疼痛とともに、激しい不随意運動や失神、直線歩行不全、感覚過敏、動悸、息切れなどの自律神経機能異常が幾つも現れる症例を経験。いずれもHPVワクチン接種後に症状が現れたことから、仮に「HANS」と命名、全国12県から通院中の74例の治療を継続している。

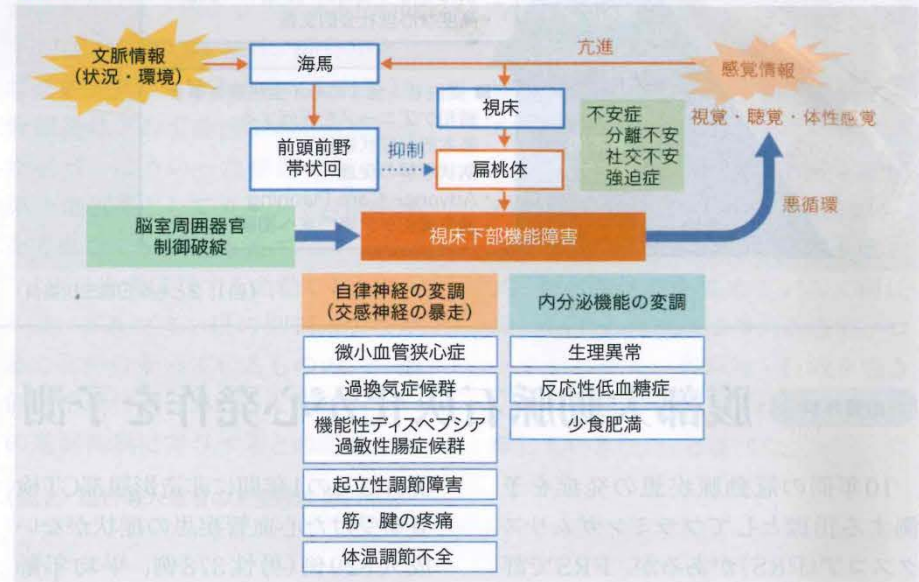
2016年6～7月、HANSが疑われる15歳2カ月～24歳4カ月の女性48例を対象に臨床症状に関する調査を実施した。観察期間は平均4年10カ月。血液検査で特定の疾患が同定されず、リウマチ・膠原病、甲状腺疾患、血液疾患がないことを確認し、約2年間の外来診察で得られた160の臨床症状から100項目を選択、これらの症状の有無を尋ねた。

調査の結果、100項目中58項目に

ついて30%以上が「症状がある」と回答。頭痛、集中力の低下は9割以上が「ある」と答えた。症状の訴えは全身のあらゆる臓器にわたり、1例が複数の症状を併せ持つHANSであることも分かった。

「HANSといえば不随意運動ばかり喧伝されるが、多様な症状が現れる。1つの疾患名ではなく、視床下部の機能障害によって、さまざまな症状が現れる症候群だという認識が必要」との考えを示した(図)。

〈図〉視床下部機能障害と臨床症状(身体症状・精神症状)



(横田俊平氏提供)